

十五 海市巡礼

水平線の見えない内海に棲む蝶は蜃気楼を見ることがない。夢見る性をもつてはいても、その神経回路を巡るものがささやかだと知れる。そう思つて見れば、この蝶の書き散らす雑記には重複が多く、思索に広がりがなく深くもないことが理解できる。隠退して都市の活気から遠ざかり、狭いところで堂々巡りの生活をしているので、よけいにそうなのかもしれない。小人の閑居は賢人の遁世のようにはいかないのだ。たまにはこの内海から出て広い世界を見ることが必要だと思う。

純粹に觀光目的の旅行をしたことが数えるほどしかない夫婦が、年金生活者になつてみれば、簡単にその穴を埋めることはできないと知る。しかし、旅に出る人をうらやむ者は、コマージュリズムに踊らされる。旅の名分は立つものである。重症のアルツハイマー病の母を長く介護した連れ合いを、希望するところへ連れて行こう。芽生えた欲求はふくらんで、いったん申しこんでいた国内ツアーをキャンセルして海外へと向かう。すると娘が孫を連れて行けと便乗。思わず、老夫婦と童子の巡礼物語の幕が開いた。

行き先はオランダ・ベルギー。極東の島国の海辺から北海に臨む北西ヨーロッパへ、遠い道のりである。かわい子には旅をさせよという。小学生にわずかでもそういう旅を体験させるには、『カンタベリー物語』のようなツアーではいけない。自分たちで巡礼の道筋を決めることにしよう。訪問希望地には、アムステルダム、チューリップの咲くキューケンホフ、風車のある原風景キンデルダイク、陶器で名高いデルフトなどが挙がっている。孫のためには、『フランダーズの犬』の舞台アントウエルペンを加えよう。

わたしは、旅行エージェント兼コンダクターとして作業を始めた。航空便と鉄道のルート・時刻表・運賃、訪問地で見学する施設の開場時間、各都市での交通手段と移動時間、ホテルの値段と場所などなど、すべてインターネットで調べることができる。ロスタイムも考慮に入れて時間軸に並べ、最終的な旅行日程ができれば、続いてチケットの購入やホテルの予約も、クレジット・カードのパス・ワードを入力すれば、支払いの決済まで完了。手元のプリンターでE・・チケットを印刷すれば、訪問者の多いところでも、チケットをかうのに並ばなくて済む。こうして、自分のパーソナル・コンピュータを操作することで、旅行の準備が全部できた。じつは既知のことだったけれども、コンピュータの性能が上がり、インターネットを通じての情報処理法が発展・普及して、すべての業務のやりかたが変化したことをまざまざと実感した。二十一世紀の人間の活動は、二十世紀とはずいぶん

異なる条件のもとで遂行されるようになったものだ。手回し計算機を使って以来コンピュータの変遷を体験した老人は、感慨を抱かずにはおれない。孫はそういう新しい世を生きるのだ。

さて、旅行日程を組み立てたコンダクターは、すでに予行をしたことになる。グーグル・アースの衛星写真が、大陸を横断する航空機からの眺望を提供する。降り立つ空港や駅の地図が、どこから乗り物に乗ればよいか、ロッカーはどこにあるかまで教えてくれる。グーグルの地図はまた、目的地や今夜泊まるホテルへの最短の道筋を示し、必要なら、実際に通行しているように通りの映像まで表示する。人はまるで、身体を携帯して旅をしているかのようだ。それらの情報を自分の端末で無料で視ることができるのは、関係する事業者が経費を分担するようにして情報を提供しているからだ。画面に登場してわたしの脳に働きかけるのは広告である。昔の巡礼者に、善意の人がお茶や茶菓子をふるまったのとは違う。われわれは無意識のうちにコマースリズムに影響される。

旅行日程にエージェントの好みが染みこむのは避けられない。移動の便を考えてデン・ハーグを宿泊地に選んだら、デルフトへの往復を市内観光と両立させるのがむずかしい。ロイヤル陶器工房の見学よりも、真珠の耳飾りをつけた少女に会うことにした。あとで同

行から苦情が出ることになる。最終的に、スキポール空港、アントウエルペン、ロッテルダム、デン・ハーグ、アムステルダムに宿泊して巡る計画を立てた。

この行程は一つの主題を醸し出す。十五世紀末にポルトガル・イスパニアが大西洋に乗り出してヨーロッパ経済が変化し、百年のうちに、経済の重心は地中海から北西ヨーロッパに移動した。グローバル経済の端緒をひらいたその興隆の地が、こんどの旅の目的地である。十六・十七世紀、これらの港湾都市は資本と物の流れを生み出す心臓だった。旅行はその歴史の跡を訪ねることになる。もちろん、地球経済が行くところまで行きついた現代、状況は大きく変化し、かつての繁栄の痕跡は薄れているだろうから、観光客に呼びかける広告は多分に幻想を売っているのである。つまり、老夫婦と童子の旅は十六・十七世紀の海市を訪ねる巡礼に近い。

今は東インド会社の船が日本に来た頃と違う。オランダへは空を行き、水辺にない港に着く。そのスキポール空港は、アムステルダムが世界貿易の中心地だった頃よりもはるかに多くの旅行者が往来する港である。ヨーロッパへ行き来する航空便のハブ空港であろうとしてとてもよく設計されている。AからHまである乗降のための建物は扇形に突き出て、乗降客は扇のかなめにある中心部から入出する。そこには、空港に必要な諸施設があり、

小ぶりのスーパー・マーケットまである。地下には鉄道駅があつて、飛行機でヨーロッパ諸国に乗り継ぐだけでなく、高速鉄道で近隣の諸国へ行き来できる。もちろん中心部が面する道路からバスが発着し、道路の向かいにはいくつかのホテルと広い駐車場がある。これほど旅行者に便利に出来た空港を見たことがない。

オランダは、面積が九州ぐらい、人口は九州七県の一・三倍で、大国ではない。その国が経済活動を活発にするために、フランクフルト・パリ・ロンドンに対抗して、機能的なハブ空港を建設した。将来を見通した計画が実施されたのである。日本は余力のあるときにそういう計画を立てなかつた。経済の興隆期の位相差といえればそれまでだが、北アメリカから来て最初の陸地である日本は、韓国仁川にハブ空港機能を譲つた。港も同様である。十七世紀世界経済の覇権国だったオランダは、ずいぶん時を経た現代もその余得を維持することに努めているのである。少ない人口にもかかわらず、貿易輸出入額は中米独日仏につぐ位置につけて、一人当たり国内総生産は購買力平価で日本に勝る。こう知ると、日本人が自己を満足させるデータしか見ないようになっていることに気づく。

おやおや、旅の気分を削ぐことを考えている。「巡礼記」から逸れて、久米邦武ほどの識見のない者が「阿蘭陀回覧記」を書いてはいけない。

第一幕

第一、第二日

到着したのは春分のおとの土曜日。明日から夏時間が始まる。ヨーロッパの北に暮らす人々には喜ばしい季節だ。ホテルのフロントで、今宵は飲み物をふるまって祝う、と告げられた。しかし、時差でもうろうとしていた下戸の老人と孫は、八時半には寝入っていた。腕時計はすでに、眠りのうちに摘みとって蓄える一時間分ほど早めてある。

この時季から営業を始めるキューケンホフ花園へは、空港からの直行バスが連れて行く。九時前なので乗客は十人足らずしかないが、みな外国人観光客と見える。空港のはずれから平野が広がり水路のある風景。これがオランダ低地の基本的な姿なのだろう。小「学生」は、バスから異国の景色を見つめている。花園に着いてバスとのコンビ・チケットを提示すれば、携帯器具でバー・コードを読み取って入園させてもらえる。はにかんでしりごみする孫を、園内地図を配っていた女性と並ばせて、写真を撮った。わが家の庭では咲き始めたばかりなのに、ここではすでにチューリップが満開。

すばらしく整備された花園だ。しだいに入園者が増えた。風貌や言葉から、あらゆる国

から来ていることが分かる。遠く中国・台湾・韓国からの客がいる。もちろん日本人観光客もいる。ここは、ほかのテーマパークなどにくらべれば、お金のかかった施設が少ないように思う。むしろ植物の育成・手入れなどの地道な作業に支えられているのだ。世界に名をはせるこの花園は、農業分野が力をもち、また外国人観光客を引きつけるノウ・ハウにたけていることを教える。広い波及効果をもって雇用に寄与していると想像できる。美しい花々に感動した孫は、「ちよつと待つて」と言つて、アングルを変えながら写真を撮りまくつた。学習誌に付いていた乾電池式のデジタル・カメラだ。途中で電力不足の表示が出て、乾電池を買う。昼食後、絵はがきを買つて両親に二言三言書かせ、園内のポストに投函した。はがきと本人とどちらが先に日本に着くか。

充分に楽しんでスキポール空港へ戻つた。ここから今日の宿泊地アントウエルペンをめざす。用意しているE・チケットはインター・シティーのものだ。乗りこむと、始発ではないから三人いっしょに座る席がない。孫は、ヨーロッパ人の中に独り座るのをためらつて、しばらくしてようやく座つた。国際高速列車タリスにすればよかつたのだが、こういう体験も必要だろう。列車はベルギーに入ったはずなのに、統合されたEUの国境を認識することはできなかつた。住宅のたたずまいが少し変化しようだが、ぼんやりした旅人

には区別がつかない。復路でも注意して見たが国境は分からなかった。古い様式を残している大屋根の住居はベルギー側にあったのだろうか。ヨーロッパは、昔から十以上の異なる言葉話す国々が交流を続けて文明を高めてきたのだけれども、一つの共同体になって統合がさらに進み、文明の進展に重大な影響を与えるにちがいない。日本が地球化の進む世界で孤立しがちなのにくらべて大きな利点ではないかと思う。

やがてアントウエルペン駅に到着。乗車時間は一時間四十分、もしタリスに乗っていたらその半分。オランダの広がりを感じた。列車は地下のプラットホームに到着して、二つの長いエスカレーターで上がる。見上げると、その先にバロック調の立派な駅舎の内部が見える。外に出てふり返れば、外観も金色の装飾のある壮麗な建物である。二つのトランクを引いて今夜のホテルへ。名はコロンブス、海市巡礼にふさわしい宿だ。受付にはわたしよりも年長の老人がいて、市内地図を渡しながら陽気に説明した。エレベーターは入口にドアのついた旧式の小さなもの。二つくつつけたベッドに三人が寝る。

休憩後夕食をとるために外出。道をはさんだ斜め前にあるオペラハウスを左手に見ながら交差点に出れば、そこは市の中心。右折して西に向かうと車の通らない道だ。近世の人の立像があるが、わたしの知らない人だ。もう少し行くとヴァン・ダイクの像があった。フランドル絵画の中心地にふさわしく、道端でガラス板に幻想的な絵を描いている人がい

て人だかりがしている。なかなかうまい。みやげに買えばよかったとあとで同行が言った。あらかじめ分かっていたことだが、ルーベンスの家はすでに閉館。明日も月曜日だから見学することができない。

第三日

アントウエルペン駅のロッカーにトランクを預けたら、操作画面に日本語もあった。日本人観光客が多いのだろう。フルン広場でメトロを降りて地上に出ると、ノートルダム聖堂を背にしてルーベンスが立っている。旅行案内書に聖堂は十時に開くと書いてあったのに、今日はなにごとかあるらしく、十一時まで待たなければならなかった。まず十六世紀中頃に建てられたという市庁舎を見物した。ここも壮麗な建物で、前の広場に、悪者の巨人から切り取った手を投げようとしている兵士が立っている。市の名のアントウエルペンは、「手を投げた」ことに由来するという。日本ならさしずめ鬼退治の地名譚だ。ヨーロッパでも説話が観光客を呼び寄せるのに一役買っている。

市庁舎の裏手にあるスヘルデ川の岸は、外海からずいぶん内陸深くにある。だがこの港が、F・ブローデルによれば、十六世紀ヨーロッパ経済の中心地だった。外洋船の入り

こめる川のない日本では考えにくいだが、大きな平野をもつ諸国で港町は海から入った奥に発展した。その繁栄が、ベルギー一の大聖堂や、豪華な市庁舎を建てさせたのである。駅舎は十九世紀末に建てられたらしいが、イギリスに次ぐように鉄道網を発展させたベルギーが豪氣を表現したかったのだろう。

ノートルダム大聖堂に入る。百七十年もかけて建設された寺院は、意匠に贅を尽くして、大きなステンドグラスや絵画で装飾されている。言うまでもなく、正面左右にあの高名な絵画が掲げてある。キリストが十字架にかけられる前と槍で刺されて降ろされた場面の、二つの巨大な絵である。この絵がここに掲げられているかぎり、近世絵画の巨匠―世間でこの言葉は安易に使われすぎているが―ルーベンスの名を不朽にするだろう。おおぜいの見学者にまじって、老夫婦と童子の巡礼者もそれをしばし見上げた。孫に、キリストという人と、絵を描いたルーベンスのことをごく簡単に説明する。絵は力強い作品だから、きつと印象を残すだろう。発光を停止する操作のできない老人のかたわらで、小学生はフラッシュのないカメラのシャッターを押している。

イギリスの女流作家ウィーダの小説『フランダーズの犬』が日本では有名である。孫もテレビのアニメーションで観ている。というわけで、聖堂前の広場に、「フランダーズの

犬うんぬん」と日本語で刻んだ石が置いてある。広場に、当のイギリスやベルギーのそういう碑はない。日本語の石碑は、好奇の眼で見られて見られているだろう。それを見た孫は、もつと大きくなったとき、ルーベンスの絵を物語とむすびつけることがあるだろうか。アニメは少年ネロを小学生くらいに描いているが、原作の小説は独り立ちしようとする十五歳に設定しているそうだ。昼食をとってそのあたりを見て回る。孫はベルギー国旗のバッチを見つけた。特徴あるチョコレートのはら売りをみやげに買うとき、この子はチョコレートを食べないと話したら、女主人は「めずらしい子ね」と言った。

片道の線路だけある狭い道でトラムに乗って駅に戻り、ワッフルを食べて、オランダへ引き返すためにインター・シティーに乗りこむ。ロッテルダムには五時前に着いた。機能的で大きな駅舎だ。駅にあった小さなスーパー・マーケットで買った食料で夕食を済ませ、孫も祖父も七時半には寝入ったらしい。だが老人は熟睡できない。

第四日

朝、中央駅に向かうのに、タクシーで回り道をして聖ローレンス教会に寄る。近世ヨー

ロッパを代表する人文学者「ロツテルダムのエラスムス」に会うためである。教会前の広場に、先生は広げた書物を手にして立っていた。こちらの嗜好で孫には迷惑なことだが、その前に立たせて記念写真を撮った。高校生になって歴史を習う頃、その写真が記憶の助けになれば……。荷物を駅に預けて、ローカル列車で市内の別の駅に向かう。キンデルダイクに行こうとしているのだけれど、バスの始発場所まで ترامで行くのは時間がかかりそうなのでそうしたのである。駅前のその名もうれしいスピノザ通りにバス停があって、そこから乗れるはずだ。時刻表を確かめてユトレヒト行きバスを待つ。ところが、定刻直前にふと太陽を仰ぎ見て、方角が違うことに気づいた。道路を渡って向かい側のバス停に急ぐ。なんとということだろう、同時刻発でこちらこそ乗るべきバスがすでにいて、十五メートルまで近づいたところで無情にも発車してしまった。手を振ったがあと祭り。今朝は駅でも方角を間違えた。睡眠不足で頭が働いていない。後日写真を見ると、老人の眼はくぼんでずいぶん疲れたようす。

時間を一時間無駄にしてキンデルダイクに着く。E・チケットを示したら、入口の人が映像館で説明をするとそちらを指さした。前後に大きな二面、左右に四面の小さなスクリーンで、趣向を凝らした映像が、この場所の歴史や水の汲みあげの重要さを語りかける。

うかつなことに、キンデルダイクという地名が「子供の堤防」ということを初めて知った。名の由来に、子供が（多く）いた、あるいは、子供を使って堤防を築いたなどの説があるようだ。十三世紀から湿地帯に住むようになった人々は、水路を築いて排水し耕作地を広げたが、その土地は水分が減ると沈下し、排水が必須になったのだそうだ。そうして風車が登場し、汲みだした水を一帯の土地よりも高いところへ流すようになったのだ。この天井川は、自然にできたのではなく人工のものだ。この世界遺産は、そういう低地が六十パーセントもあるオランダの国土の形成を説明するという重要な役目を担っている。あとで調べてみたら、海面よりも低い土地は国土の四分の一ということ。今では、モーターを使って、水を天井川に、さらに海へと排水しているのだ。

風車は水を送り出す代わりに観光客を迎え入れるために立っている。堤防の上を散策しながら数えると十八見えた。一つの風車が入場券のある者に見学を許している。風の力を伝える中心軸はずいぶん太く歯車も大きい。しかしみな木製だから、作ろうと思えば東洋でもできただろう。オランダではむしろ近くに大きな木材を見つけにくかったかもしれない。風車の塔は広くないから、かまどは小さく台所用品も多くはない。ベッドも小さい。川魚を獲る網のしかけなどもある。ヨーロッパと日本で、多少の差異はあっても、近代以前の暮らしに大きな違いはなかったことが判る。ここは冬寒かっただろう。別の風車には

居住者がいるようで、川舟がやってきて人が入って行った。観光客はまだ多くはないけれど、暖かい良い天気だ。年配の男性二人がのんびり魚釣りをしている。土手には春の野草が咲き、水面にある大きな巢の近くを水鳥が遊泳している。孫はあいかわらずたくさんの写真を撮っている。映像館では、別に一ユーロ払って自分で機械を回す方法で、五十セント銅貨を圧してメダルをつくった。よい記念メダルができた。

ポンプが水を汲みあげる川に向かう。キンデルダイクはマース川と支流にはさまれた角にある。トライアングルを描いて人と自転車を渡す渡し船に乗って対岸に行き、ロッテルダムへ向かう水上バスに乗る。地元の人々の交通機関である。四十分ぐらいのんびりと川の眺めを楽しんだ。やがて、ロッテルダムのシンボルであるエラスムス橋が見えてきた。片側の橋脚だけが屹立してたくさんのワイヤーを引いている。橋の背後には傾いた建物が見える。オランダでは荷物の上げ下ろしに便利なように、四階ぐらいの家の前面を傾けて上に滑車をかけるフックが付けてある。また地盤が軟弱なので、横にかしいだ家もある。それを誇張して大きなビルディングにしたのだ。ロッテルダムにはデザイン性を強調した実験的な建造物が多い。水上バスの着いたあたりが、近世オランダでアムステルダムと競った貿易港だったのだろう。ここも外海から奥深いところにある。

ロッテルダムから目当ての列車に乗って、デン・ハーグ中央駅に着いたのは四時過ぎ。またまごついた。予習したとき、グーグル・アースの地図は、トラムが二階から出発して地下に潜るのだとは教えてくれなかった。もよりの停車駅で地上に出ると、広場にイスとテーブルが並んで、夕暮れのひと時を楽しむ人々であふれている。トラムを引いてそばを通り過ぎてみると、孫がトイレに行きたいと言いだした。急を要するらしい。目の前に入口の開いた店があるので入って頼んだ。若い女性が二人いて、どうぞと二階を指さす。二人のいるカウンターのうしろには酒の瓶が並んでいる。ここはバーなのだ。下りてきて孫にも「サンキュー」と言わせると、にこやかにうなずいてくれる。ついでにホテルの名を告げて尋ねると、「その先の角を右に曲がったところよ」。

ホテルで一息つく。同行二人はしばらく動きたくないというので、一人で外に出て南へ向かう。七百メートル足らず歩けば、スピノザに会えるはずだ。広場から遠ざかるにつれて、夕方近くでもあり、人通りも少なくて寂しくなった。訪ね当てる人は、道の中央分離帯の、今は葉を落とした木の下にひっそりと座っていた。右肘をイスの肘かけにつき、手を肩の近くに置いてこちらを見つめる。思っていたよりも若い顔だ。四十四歳で亡くなったのだから不思議ではない。今朝会ったエラスムスほど権威づけられたようすをしていな

い。むしろ憂いをふくんでいるように見える。イベリア半島を追われてアムステルダムに
来た家族に生まれた人は、超絶した思想のためにユダヤ教徒から排撃され、キリスト教徒
からも無神論者と見なされた。整然とした『エチカ』を著わした哲人はまた、人間性豊か
な善き人でもあったことをその書簡集が教えてくれる。この「レンズ磨き」で暮らしを立
てているといううわさの人を、もう一人の天才肌のライプニッツが訪問して談話したとい
う。その翌年、銅像の前にあった家の下宿人は、朝には動いていたのにその日のうちに亡
くなっていた。まるで「唐宋伝奇集」の中の名作を聴くようにゆかしい。

スピノザとの面会の帰途適当なレストランを探したが、どうもホテルの近くには子供連
れにふさわしいところがない。一番近くて静かなトルコ料理店に決めて、そこで夕食を食
べた。店の戸に「ここではカードの暗証番号が盗まれる」というぶつそうな貼り紙がして
あった。中傷なら店が剥がすはずだから、これは現金で払えと誘導するジョークなのだ。
壁にトルコ帽をかぶった高位の人の肖像画がある。スルトンだろうか。店の装飾品は初め
て見る独特なもので、これがトルコ風なのだろう。孫はラム肉をたくさん食べた。

第五日

ホテルにトランクを預けてデン・ハーグ観光。まず、オランダ一というマーケットに行く。テントの店が広場を埋め尽くしている。魚肉・野菜・果物などの食料品、あらゆる種類の雑貨・衣料品を売っている。どちらかといえば庶民の市場なのだろう。黒くて長い衣服をきたモスリム女性を多く見かけた。李を買って孫と食べたらおばあさんに怒られた。次に政府中枢へ行く。西の入り口にウィリム二世の騎馬像があり、国会議事堂や総理府がある権力の中心域だが、中庭を歩くことができる。現代のオランダ王はハーグに住んでいるけれども、憲法上、アムステルダムが首都ということになっているのだそう。ナポレオンがヨーロッパの覇者になって占領した時代の後遺症か。特色ある建築群だが、壮麗というほどではないと思う。オランダは質実を重んじる国だということなのだろう。北にある大きな池の側から、議事堂後方に高層の近代建築群が見える。巡礼は過去の幻影を売る観光名所だけを巡っていて、現代のこの国をあまり見てはいないようだ。

国会議事堂のそばにある美術館は修築中。その所蔵品も合わせて展示している市立美術館へ向かう。教科書にも出る名品があって、まことにうらやましい。レンブラントの「解剖学講義」や晩年の肖像画、フェルメールの水辺の向こうの街の景色を描いたもの、ルー

ベンスもある。この頃のヨーロッパ絵画に匹敵するほど精緻に描く技術は、当時の日本にはなかったと納得する。あるはずのフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」が見つからない。警備員に尋ねたら、彼女はイタリアに行っているそうだ。近代の画家たちの作品が、この近代的な美術館の本来の収蔵品らしい。記憶に残るほどよく鑑賞していないが、モネ・ピカソ・カンディンスキー、それにロダンの絵があった。モンドリアンの作品は数が多い。デルフト陶器など工芸品もある。小学校で「絵描き」になりたいと書いたという二年生は、たくさんのヨーロッパ絵画を観てどうという印象をもっただろうか。

アムステルダム行きインター・シティーの二階の車窓から、広々とした田園に何度も色とりどりの花畑が見えた。すっかり春の華やいだ風景だ。中央駅は、十九世紀末に建てられたレンガ造りの瀟洒な建築だ。駅前からトラムでホテルへ。王宮から西へ行く通りの運河を二つ渡ったところ、店の連なるアーケードに大きくない看板が下がっていて、一つの店の左端に扉がある。呼び鈴を押して開けて入って驚いた。急な階段が、初めまっすぐそれからゆるやかに右に曲がって三階まで続いている。次の日入って来た客は、「オー、マイ、ゴッド」と叫んだ。階段の幅は、日本の半間よりも狭いかもしれない。これでは大きな家具など運びこめなくて、家の外のフックにかけた滑車で釣り上げて窓から入れるほか

ない。老夫婦は二つのトランクをかかえて上がる。四階の部屋をあてがわれた。こぎれいにしてあるが、エクストラ・ベッドがあるから手狭だ。廊下の反対側には庭があり、窓よりもさらに高く枝を広げた大木が立っている。

六時頃外へ。旅行案内書にある海鮮料理の店に入った。この旅で初めて連れ合いは満足できる料理を味わった。食べた料理の絵を添えて記録する手帳は、その晩のものが一番詳しくなったはずだ。ここは人気のレストランらしく、まもなく満席になる。夕食に子供連れの客は異例のように感じたが、孫は塗り絵の用紙と色鉛筆をもらった。

いつものように早めに横になっているところへ、鍵を閉めたドアが開いて女性の声がした。と思つたらすぐに閉まった。セキュリティーに疑問を感じながら眠りに落ちる。

第六日

昨夕まだ陽の沈まないうちに近くの西教会の晩鐘を聞いたが、夜半にも鐘の音が聞こえ、夜明け前にも鳴っていた。鳥もさええずって合唱する。三階の食堂に降りるとき、もう出立するイスパニア系の女性が、「昨晩はごめんなさい、フロントが部屋の割り当てをまちがえたの」と挨拶した。鍵は磁気カード式だから二重発行したのだ。食堂は広くないけれど

整頓されていて、各テーブルに鉢植えの水仙などの花が飾ってあり、紅いローソクに灯がともしてある。トラムの走る通りに面したバルコニーに、イスとテーブルを置き、チューリップの鉢もある。東に王宮広場が見える。巡礼者には悪いホテルではない。

鐘の音を聞いた西教会のとなりのアンネ・フランクの家へ行くと、すでに行列ができている。早い時間のE・チケットは取れなかったが、二十分早く入れてもらえた。アウシュヴィッツに立つほどではないにせよ、人間が残酷なことをする者だということを認識させられる。狂気のヒトラーとその扇動に影響された者たちだけでなく、政府機関のそれぞれが巨大すぎてサボタージュするすべを考えることもできなかっただろう。祖母は孫に写真を添えた日本語訳の『アンネの日記』を買い与えた。どうしてそんなことが起きたのか考えられないだろう。老人も人間の未熟さを痛感することしかできない。訪問者の書きこみ帳に、三人それぞれに名を書いた。

トラムに乗ってワートルロー広場で下車、レンブラントの家へ。ここでも、どこの国から来たか、何歳か尋ねられた。記録して観光対策の資料にするのだろう。多くの観光客を受け入れる国はその手当を尽くすのだ。エッチングの絵などを中心に作品が展示してあり、

工房のようすが分かる。書架や印刷機が置いてあり、希望すれば印刷の手順を体験することが出来る。版画の自画像もレンブラントという人間を描き出してもらえずところがない。人生の歓びと辛酸をなめ尽した人は、そのときどき自己を見つめて、その内部まで透視するほど描きぬいた。残されている自画像を観ていけば、一人の人間の一生を語るすぐれた物語を読んだような感想をいだくだろう。

ワテルロー広場には古物市が立っていた。そこからマヘレの跳ね橋の見えるところに行く。すぐそばにも跳ね橋があり、その開閉と船の通過を見物。それを渡つてもみた。愉快なことに、信号機が船に見えるようになっていた。レンブラントは、少し歩いたところ立っていた。巡礼者はこの目当ての人を何度も見かけたのだけれども、なんととっても厚みのある存在に会いたかった。ここでその人は、肖像画とは違い、気力にあふれる壮年の姿をしている。その下に、「夜警」の絵を題材にした動きのある数人の像もある。孫のカメラで孫と偉大な画家とを一枚の写真に収めた。

昼食後運河クルーズ。船は最初に中央駅のうしろの港に出た。北海へ開けた大きな湾は閉めきられて湖になっているはずなのに、北欧からのとても大きな客船が停泊している。びっくりしたが、ここから西に運河が開かれ、外洋船でヨーロッパ諸国と往来できるそう

だ。十七世紀に最も栄えた港は、現代も生き残りを図っていて、歴史の遷り変わりを考えさせてくれる。東側からまた市街地を縦横に走る運河に入って行く。旅行前に連れ合いとテレビ番組で予習していたけれど、実際に一時間近くの間びりと巡れば、アムステルダム
の街の外観を頭に刻むことになる。

最後に国立美術館を見学。十九世紀末に建てられたレンガ造り。個性ある立派な建築だ。二階の展示室で、巨匠たちの力作を観る。フェルメールの牛乳を注ぐ人に対面。ほかにもゴッホなど名の知られた画家たちの作品がある。レンブラントの大作「夜警」は正面奥に鎮座していた。

ここでも小学生は写真を撮ろうとしたが、不具合があると訴えるので、手にしてよく見ると乾電池を入れる部分のふたが閉まらない。電池を出し入れしてもてあそびすぎたのだ。初日から電力不足の警告が出て何度も電池を買ったが、その回路が傷ついているかもしれない。案の定、帰国して写真屋に出したら、画像をプリントできないと言われたという。祖父が記録カードをパソコンに入れてなんとかキューケンホフでの前半百六十六枚を救出し、埋めあわせに、花園に立つ孫の写真を中心に四つの都市を代表する四人の銅像を配置して、A4版一枚にプリントしてやった。巡礼行の記念帳にスタンプを押すよりもよい

と思うが、成人したときうれしく思ってくれるかどうか。

運悪くもう一人もおなか痛んで、圧巻の名作ぞろいの作品を落ちついて鑑賞することはできなかった。疲れてもいるので、もう一度元氣を取り戻して見直すこともせずに美術館を出た。この旅行最後の山場は少々心残りに終わった。

スキポールの鉄道切符売り場でプリペイド・カードを買ったとき、子供のカードをどうすればよいか適切な助言が得られなかったので、トラムに乗るたびにチケットを買った。鉄道は安い子供料金だが、トラムは大人とおなじ料金のようにだ。旅行者の多いアムステルダムでは乗車券を買わない者にきびしく注意を払っているようす。車掌はアフリカ系の女性が多い。街でモスリムや多くの外来の人々を見た。総人口のうち無視できない割合の移住者が暮らしていると思われる。ヨーロッパ連合になって、西欧にそういう人々が増えてくるのだろう。グローバリゼーションの時代だ。ダム広場に戻り、ナポレオンの弟が王だった宮殿を一周。ナポレオン三世はここで生まれたのだろうか。市庁舎として建てられたという建築は、それほどの見ものだとは思わない。すでに夕刻。

第七日

今朝も旅亭で鐘の音と鳥の声を聴く。「楓橋夜泊」の気分になって床の中で漢字遊び。

「水巷春曉」

鐘声鳥歌蘭都曉 睡氣未去臥狹床

異国巡礼雖勞身 爺孫意氣尚求行

同行の学生は毎朝六時に起きて、母親から命じられた簡単なワークブックをこなしている。ほんとうは今日アンネの家に行けば時間の配分がよかったのだが、E・チケットをとろうとしたときにはすでに予約がいっぱいだった。ホテルの周辺地区は個性的な店がありぶらつくのによいと旅行案内書に書いてあるので、付近を散策。しかし、店の数はそれほど多くはない。連れ合いがみやげの心づもりにもしていた店はまだ開いていなかった。時間は早い、ゆとりをもってチェックインをするために、列車で空港へ。